

## 会 議 録

1 会議名 第2回不登校児童生徒のための教育機会確保に係る検討会議

2 開催日時 令和5年11月20日（月）15：00～16：30

3 開催場所 小倉北区役所庁舎東棟503会議室

4 出席者（敬称略）

（1）構成員

小嶋 秀幹、シャルマ 直美、畠山 めぐみ、三浦 咲弥

本田 禎之、村上 博志、下田 ゆみ、上田 あけみ

（2）事務局

高松学校教育部長、中溝不登校対策担当部長、浜崎指導企画課長、  
有田生徒指導課長

5 議題

（1） 令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に  
関する調査結果について

（2） 児童生徒及び保護者へのアンケート調査結果

（3） アンケート結果から見える「軸に据えるべき取り組み」

（4） 学びの場・居場所づくりの取組事例紹介

6 議事要旨

○議題（1）「令和4年度児童生徒の問題行動不登校等、生徒指導上の諸課題に  
関する調査結果について」

【事務局】

**資料3** 「第2回 不登校児童生徒のための教育機会確保に係る検討会議」  
議事（1）～（4）説明資料 に基づき説明。

【A構成員】

COCOLOプランには「教育支援センターのICT環境整備」と記載がある  
が、北九州市では、オンラインで学ぶ場合、「みらとび」が在籍校からライブで  
授業を中継するということか。

【事務局】

学校から配信している授業に関しては、ライブ配信である。その時間に受ける

授業で、Microsoft Team を使って配信をしている。子どもたちは、学校から配られている 1 人 1 台端末を使い参加するという形になっている。

【A 構成員】

ライブ配信は、自分のクラスの授業とは限らないということか。

【事務局】

その場合もあるし、そうではない場合もある。

○議題 2 「児童生徒及び保護者へのアンケート調査結果について」

【事務局】

資料 3 「第 2 回 不登校児童生徒のための教育機会確保に係る検討会議」  
議事（1）～（4）説明資料

資料 4 「学びの場と居場所づくりのアンケート」調査結果 に基づき説明。

【B 構成員】

資料 4 の 10 ページ、11 ページに、いわゆる不登校になるきっかけで、小学生の回答は「先生のこと」がものすごく高い。中学生になると、半減以下という状況があって、何が違うかという、やはり固定担任制が大きいと思う。いろんな多様化の時代と言われている中で、生徒から、教員を見たときも、多様性というかいろんな価値に触れることって大切なことだと。うちの学校でも担任の先生を変えてくださいというのが毎年出てくる。うちの学校は、朝のホームルーム、帰りのホームルームはなくても、面倒を見てくれる人が担任として 1 人だけいるが、その先生ですら変えてくれと言うのだから毎日会う先生になるとやはり大変なのかなという気がして。うちは来年から全員担任制というその複数担任制、それからチーム担任制。2 クラスに 3 人の担任をつけて、ローテーションをしてもらおう。今度新しく作られる学校もやはり、生徒から見て、先生というのをいろいろ選択できるというか、そういったものを考えていただきたい。もっと言えば小学校も、教科担任でおこなった方が私は個人的には良いと思っている。

【事務局】

まず、学びの多様化学校は、まだ作ることが決まったわけではない。もちろん前向きに検討したいと思っているが。その点については、考える際の参考にさせていただきたい。本日、後程、学びの多様化学校の先行事例の紹介をさせていただく予定である。その学校として、岐阜市の草潤中学校が令和 3 年から動いているが、この中学校は、お子さんに担任を選ばせている。年度初めに自分はこんなことを大事にして、勉強していくということを先生方がプレゼンする。それを聞

いてお子さんが担任の先生を選ぶ。3ヶ月に1回ぐらい変えられる。いろんな大人の方が関わるというのは大事なことだと思っている。教科担任制、学級担任制それぞれ良さはあるが、いいところを参考にして考えていきたい。

#### 【事務局】

もともと小学校は学級担任制をとっているが、今、北九州市では、特に高学年を中心に、教科担任制を推進している。文科省からも、そういった加配の配置もあっており、いろいろ専科指導を入れたり、教科担任制を入れたり、また一部の学校では持ち合い授業といって、同じ学年の中で、例えば、国語は1組の先生が教える、その時間を利用して、社会科は、2組の先生が教えるとか、または音楽が得意な先生が音楽を全クラスで教えるというような方法をとって、子どもをいろんな多様な目で見たいこうという取り組みも始まっている。ただ、やはり小学校、おっしゃられた通り小学校の子どもたちにとって、先生という存在は非常に影響が大きいというのを改めて感じているところである。また小学校の取り組みをいろんな面で見えていく、チームで子どもに関わっていく担任の先生が1人で抱え込まないという取り組みを推進しているところである。

#### 【C構成員】

本校でも持ち合い授業をしている。高学年でしているが、社会科と理科を1組と2組の先生が入れ替えて行うなど、子どもたちを学年で見るというようにしている。また、保健の授業を養護教諭に関わってもらったり、音楽の得意な先生に高学年に入ってもらったりと、いろいろな先生で子どもたちを一人一人見るというようにしている。担任1人にはさせない。1人だけで関わるということをしなないように学校では取り組んでいる。

#### 【事務局】

実際に年齢の近い方とか、日頃、保護者の方とお会いになっている方がアンケート全体をみて、ちょっと偏りがあるんじゃないかなという心配も我々はしているが、それについてご感想等いただければ。

#### 【D構成員】

このようなアンケートは、非常に参考になる。先ほど委員のご発言があったが、「先生のこと」が小学生の中で、利用のきっかけになっている。その点は、予防という意味で不登校の児童生徒がこんなふう考えているというのを、多くの学校の先生方にフィードバックしていただきたい。今不登校になっている人への働きかけや環境をどうしていくかということも、もちろんこのアンケートから読み取れるが、先生がこれだけ理由になっているんだということや、一部教科

担任制に対しての意義がこんなにもあるとか、通常の学校に対してフィードバックしていただくことによって、今、学校に来ている子どもさんたちの居心地にもフィードバックできるような内容ではないかと思った。大きい声で怒るとか怒る声が聞こえないとか、それから先生が大声で怒らないとか、そういったことがアンケート結果の中にいくつかある。今日も校長先生方が来ていただいて、そんなに学校の中で大声ないよと思われるかもしれないが、実際そういう学校もあるんだなということが、この結果からわかったというのが1つ。

もう1点、子どもの回答と保護者の回答が比較的重なっていて、順位がぴったり同じところもあったり、多少入れ替わったり少しずれたりはあるけども、思いのほか、子どもと保護者の回答が重なっていると思った。

それから自分の感想だが、学校に行けない、あるいは行かないという子どもさんの思いとか、何が苦手なのか、どういうことがあったらいいのか、もっとこうだったらうちの子行けるのになという点で、学校に子どもさんが行っている親御さんよりも深くご自分の子どもを理解したりいっぱい会話をしたりしておられるのだろう。接している中で、思いも重なって、あるいは子どもの思いに近づくような感じになっているのかな、と思った。

三つ目は事務局にお尋ねしたいが、どういうところで偏りを心配されているかをお聞きしたい。

#### 【事務局】

我々の心配は、今回アンケートの対象として考えたのが、不登校になりかけているようなお子さんなのか、ある程度自分の居場所が形になった後のお子さんなのかというところで、教室にも行くのだけでも、学校だけじゃなくて、フリースクールとかにも行っているよというお子さんたちが中心の答えになっているところを、心配をしている。もしくは、全く今学校に行けてないお子さんに対して、その声が果たして拾えているのだろうかとか心配もあり、その2点を心配しているところである。

2点目の方は、なかなか届いてないところなのだろうと思う。今回のお答えの中でも、学校の中に居場所が何かしらありそうだなというのが読み取れる。もうとにかく家から出ませんというお答えばかりではなかったのが、そういう傾向なのかなと感じている。

#### 【A構成員】

偏りがあるのではということに、的確にお答えできるかどうか分からないが、初めにこのアンケートをいただいたときに、今回は、基本的には、ステップアップルームや「みらとび」に繋がっていたり、教育支援室に行っているお子さんたちが中心になるだろうというお話だったので、アンケートをいただいた時も、一

応前提としてはそのように拝見した。

将来のこととか、将来について考えているところというアンケートの内容を拝見したときに、すごくエネルギーがあるんだなという印象を受けた。これがもし、どこにも繋がっていないという 400 数十名のお子さんたちに、もし聞いたらこういうまたちょっと違った結果傾向が出るのかなと思う。でもこれはあくまで私の勝手な想像である。アンケートに関しては、私としては、希望を感じることができたという印象である。

質問6のところだが教室に行かなくなったきっかけという質問のところ、やはり小中学生ともに「学校に行きたくない気持ちになった」「学校が怖くなった」というところが上位にきており、その他細かい選択肢がある上での、この結果である。この結果は、小中ともに1位、2位というところ、私はその子ども達のうまく言語化できない気持ち、どうしていいかわからない。子ども自身もわからない。親も知りたい、でも難しい。誰も答えがわからないという状況かなと思う。これに対して、どのようにお感じになっているのか。

#### 【事務局】

この設問を作るときに最初は正直、友達のことから、見た目のことぐらいのところまで、設問として用意していた。はたしてそれで、皆さん答えてくれるだろうか、無理やり自分の気持ちを当てはめて答えるんじゃないかなという心配もあったので、少し包括的な話になるが、学校に行かなくてもいいと思ったよというところを後から加えた。その結果、少しぼんやりしたアンケートになってしまったのかなという反省はあるが、また次回お尋ねする機会があれば、学校に行かなくてもいいと思ったきっかけは何っていう、もう一つ深掘りができたのかなという反省がある。

#### 【A構成員】

本当に漠然とした選択肢なのかもしれないが、実はこれこそが私は、当事者の子どもにも寄り添っている選択肢なのではないかと思っている。この選択肢を入れていただいたことをとても親としてはありがたいと思う。

また、質問7、8の結果を拝見したときに、やはり小学生も中学生もみんな安心安全な居場所を求めているんだなということを感じた。家にいたい、家以外の居場所が欲しいなど、回答にあがっているが、質問8で、安心できる居場所があるところとか、中学校の外に居場所があるとか、安心安全が担保されたそういう場所が、もっともっとできていくといいなと感じた。

#### 【E構成員】

まず質問3の「教室以外で最もよく利用している場所」という質問について、

私がこの小中学生の回答を比較して思ったことは、まず小学生は保健室であったりとか、デイサービスであったりとか、主に居場所を求めている児童が多いのではないかなと思った。それに対して、中学生は、居場所を求めているということは大前提として、それに加えて学習できる場所というのを求めているなど感じた。それが教育支援室という回答が1位と2位となっていることからわかると思う。私も高校生の頃に、あまり学校に行けていない時があり、その頃、高校生になると勉強の内容も高度になってくるので、本当に何日か休んだだけでもついていけなくなったりするってこともあるので、小学校よりも中学校、中学校よりも高校というように、行かないことに対して、勉強に遅れをとってしまうんじゃないかという不安は、やはり児童生徒にも出てきてしまうのではないか。小学生に対してはまず、居場所づくりを行っていくということと、中学生はそれに加えて、学習支援というものを、やっていくべきなのではないかなと思う。

中学生は勉強の内容が高度になるということもあるし、高校受験というのを見据えているので、それに対する不安を抱えている生徒が多くいるのではないか。自分も受験の時に不安を抱えていたので、普通に学校に行けている生徒でも不安がつきまとうものである。それに加えて、学校に自分は行けていないと思っている子は、よりその不安が増大してしまうという現状はあると思った。

続いて、質問9の結果を見たときに、勉強したいとか、高校に進学したいと思っている方々が予想以上に多いなと思った。児童生徒も、本当は実際に勉強したいし、学校に行きたいという思いながらもできない自分に対する自己嫌悪感だったりとかがあると思ったので、そういうところの心理的サポートという部分は大事だと思う。

#### 【事務局】

おっしゃる通りで、安心できる居場所があるという前提で、さらに中学校になると進学が気になったり、学力の面で不安があったりという、質問9の「その他保護者」の欄だが、16ページの左下にあるが、「将来について考えていること」というお尋ねに対し、自由記入欄に「漠然とした不安感」と答えている保護者がいらっしゃる。本当に我が子の将来を心配するあまり出てきた言葉だろうと感じている。実際、その不安感に対してどうこたえられるだろうかというところを私たちは、今答えを持ち合わせていない状態なので、これから考えないといけませんが、それについて、今日ご欠席されている長阿彌構成員から、アンケート調査についての感想でメモをいただいているので、そこから一つ紹介をさせていただく。

『質問9について、子どもたちの答えの中に「お金持ち」が多いのが気になる。』という意見。もう一つが、『小中学校での進路指導が、将来何になりたいかという職業の姿ではなくて、どういう、中学、高校生活を送りますかみたいな形で進

学の方にイメージがいつているのではないか』ということをお長阿彌構成員はおっしゃっている。やはり今、三浦構成員からご紹介あったように、進学についての不安はもちろんあると思う。勉強についていけないとか。ただ、今ここで、はたして勉強について行けなくて、将来自分がなりたい職業になれるかなれないかという答えは多分誰ももっていない。そこに対しての何かしらの答えを出してあげられれば、その子たちは安心して今はエネルギーを蓄える時という判断ができるのかなということ少し考えているところである。そのような形で不安の解消はすごく大事なことで我々も考えている。

#### 【F構成員】

子どもたちは、学校に行けない分、なかなか勉強についていけないんじゃないか、不登校になるきっかけというのはどこにあるかわからないが、やはり勉強に関する、学習に関する不安というのは非常に大きいものである。さらにその子どもを見ている保護者の不安もさらに膨らんでいる。お子さんが不登校であると、「この先進路はどうなるんでしょうか」という子どものことを考えているけれども、進路指導、要するにこの先どうなるのだろうかという不安の方が先走っている。どのようにその支援をしていいたらいいかということ常々考えているところである。また新しい学びの多様化学校は、まだ設置するとは決まっていないということだが、20、21、22 ページにある資料をみると出来ることが大前提で言っているのかなと思ったが、それに対する期待の度合いが保護者は非常に大きい。しかし、子どもは、できたとしてもあまり通いたいと思わないという人が、20 数パーセントある。これがどういうことだろうと考える。進路に対する不安というのは、通えていない現状の中で、なかなか一步を踏み出せない一つの大きな要因であると思っている。勉強の遅れに対して、この学びの多様化学校というのは、どういう支援を行うべきかは、考えていくべきではないか。

#### 【事務局】

学びの多様化学校の話が出たので、その点についてお答えしたい。児童生徒が約 20%パーセント、そういうちょっと工夫した学校があったとしても、行きたいと思いませんとお答えになったということであるが、これは実は今フリースクールに行っているお子さんとか、今、何かしらの学びの場を手に入れているお子さんには、そんなに必要とされてないんだなという印象である。大半は今どこどこで学んでいるから大丈夫みたいな感じの回答だったというふうに考えている。学びの多様化学校、実は全国に 24 校しかまだない。その中には、言葉は悪いが学習塾のような学校も正直あると思っている。一方で居場所に特化したような学校もあって、本当に人間関係づくりとか、社会性を育むことだけが目的のような学校もあると聞いている。北九州市がどういう学校を作るのかと

いうところについては、これからの検討であるので、こういった方々を対象にするか、すべてを網羅するのは難しい。学びの多様化学校は、もともとは不登校特例校という名前で、教育課程を特別に編成できる学校という定義だった。大体1015時間から50時間ぐらい標準の授業時間が中学校にあるが、この特例校指定を受けると、7割ぐらいの編成が組めると。700時間から770時間ぐらいっていう学校が多いように聞いている。やはり他のお子さんが1050時間勉強する中で700時間ぐらいしか勉強してないお子さん当然学力で、課題がやはり出てくることはある。それ以外の時間については社会性を育むだとか、いろんな経験を、いろんな体験をするとか、そういったことに力を入れるという話を聞いている。そういう違った面を育てるといふか、学力だけにこだわらない学校というものを作るべきなのかなと今は考えている。

#### 【G構成員】

アンケートの対象の件だが、今回は手の届く方が対象ということだったので、完全にひきこもって、社会からつながりがないという方々の調査をするのはなかなか難しいだろうと思っていた。今回はそういう調査対象であったという報告になる方がいいのかなあと思っている。またこの年代で社会に繋がってないという方を調査対象として、数を集めるといふのは難しいと思うので、インタビュー調査なり、過去、そういう体験があったという方の質的な聞き取りでも良いのかなと思っている。

#### 【H構成員】

不登校になって間もない時期の方とか、精神的に調子が悪くて先のことを考えられない方とか、いじめをきっかけにして不登校になっている方、発達の問題をお持ちの方もいらっしゃるでしょうし、そういうお子さん達に心理的なサポートをどれぐらい手厚くするのかということとか、学びの多様化学校にも登校できないお子さんがどんなふうにして学んでいくのか、そういうところは、十分検討した方がいいと思った。

### ○議題3 「アンケート結果から見える軸に据えるべき取り組みについて」

#### 【事務局】

**資料3** 「第2回 不登校児童生徒のための教育機会確保に係る検討会議」  
議事(1)～(4)説明資料 に基づき説明。

#### 【E構成員】

「今通えている場所の居心地の向上」について、私自身が教育支援室の学習支援のボランティアをされていて思ったが、具体的に居心地を向上させるためにど

のような取り組みが必要なのかを考えた。私自身も学生ボランティアをしてみ、あまり教育支援室の方々からご指示を仰ぐということではなくて、学生が主体的にやっていることが多い。私自身もそういった学習支援のところを経験したことが今まであまりないので、どのように動いたらいいのかとか、どのように生徒に関わっていったらいいのかまだわからないところもある。そういう点においても、「こういうふうに教えてあげてください」とか指示があった方が、こちらとしてはありがたいと思うので、学生ボランティアに対してどう指導を行っていくべきなのかということについても、具体的にご意見をいただけたらありがたい。

#### 【事務局】

教育支援室において学生ボランティアの方は、利用している子どもたちから見ればお兄さんお姉さんというような自分に近い年代の方と気軽に関われるというのは非常に大きな経験ではないか、それと安心感とかいうのは非常に大きいと考えている。学習とか、いろんな活動に入っていくということよりも、どちらかという、室としては、話の聞き手というか、受け入れてくれる身近な人という「ピアサポーター」というような言い方をするが、そういった支援というか関わりを求めているところもあるし、実際に支援をする側からすると、もっと具体的に指示をもらっていた方が具体的にも関わりやすいとか、この子に対してもっとできることがあるのではないかなというようにあると思うので、そういった点についてはこちらの方から、教育支援室の室長を通じてしっかりと伝えてまいりたい。

#### 【C構成員】

「今通えている場所の居心地向上」というところで、一番上が、学校のところになっていたの、どういうふうにすると居心地が向上するのかなと考えながら聞かせていただいた。まず教室だが、各担任が子ども一人一人に自己有用感を持たせるような活躍の場というのを与えたりするようという指導をしている。それから学校のステップアップルームや保健室とあって、やはり子どもたちは、ちょっと学校に行き渋ったら最初に保健室を選ぶ。保健室を選ぶけれども、ずっと保健室にいと、やはり今の時期であると、インフルエンザなど心配もあるし、個人情報たくさん使う場所でもある。それから病気の子どもを保護者に迎えにきてもらう時に、個人的なことを電話で話すことがあるので、ずっと保健室にいるというのが難しい。小学校はステップアップルームになる部屋がないところが多く、子どもたちの居場所をどこに作ったらいいのかを考えているところである。子どもたちにとって、やはり保健室は、居心地がいいと思うが、ステップアップルームもどのように居心地よい場所にしたらいいかということ

を、考えていかないといけないと思っている。

#### 【事務局】

長期欠席対策検討会議というものを今年度から実施しており、その中でステップアップルームを設置している学校に意見を聞いているが、その中で、やはりまだまだ設置が難しい。特に小学校は、その部屋自体がなかなか環境として整えるのが難しかったり、場所はあるがそこに人がなかなか確保できないというような様々な苦慮している状況というのは把握している。その中で、今設置している学校に特にお願いをしていることと言えば、居心地のよさというのはやはりその子にとっての安心感というか、ハードルが低いというか、ただいだけでもいいんだよ、そこからステップアップルームという言葉を使うと、何かそこから教室に戻っていかなければいけないというような印象を与えてしまうが実は、特にそういうことではない。自身の中でのステップアップというところができるということ、その子が望んだ支援が与えられるような、そこにいるとこういうことをしなきゃいけないというようなものを作るのではなくて、その子たちが望んだときに、いろんな支援が与えられるとか、いつも自分のことを先生たちが気にかけてくれるからプリントを入れてくれるボックスをきちっと作っているとか、職員室の中に掲示板を作って、来ていることがわかっているよって常に学年の先生たちが声掛けをしていくとか気にかけているよってそこで自分の存在感を感じられるようなそういう場所になる。いつも先生たちが声をかけてくれるよってこういうところを作っていくことが非常に重要で、学校としてはそういうシステムを作っていけるようにしていければというところが、先日の会議の中でも意見としてあがったところである。

#### 【B構成員】

1点目は、先ほど支援室の話が出たので、私が京築事務所で指導主事をしていた時にいろいろ支援室を周っていて、室長によっては、非常に子どもたちのことを理解しているとか把握している方と、ちょっとそうでない方がいて、結構、室によって差が出ていたという印象があった。適材適所で配置をされていると思うが、ある程度、教育的な視点で、いろいろ生徒のことを見ていただける室の雰囲気とかというのはやはり違って、私今年に入ってまた周って行ったが、すべて元校長先生で皆さんしっかり子どもたちのことをしっかり把握をされていて、この数年で変わったなあという印象を受けた。そういったところもやはり、学ぶ場所を提供する上では、居心地の向上に繋がっていくのかなと思う。

2点目は、今日、西日本新聞に、母子伴走支援ということで、大野城市と太宰府市で官民一体型の取組について新聞に載っていた。前回、ご意見させていたけれども、親の支援というところも、一緒になって考えていかない、改善にはつ

ながらないのではないかというお話をした。母子生活支援施設というものが、だんだん利用者が減ってきていて、DV被害は倍増しているのに、経済的理由は半減しているという記事だった。北九州市はどうなっているだろうかと思った。本当に北九州市はそういう意味ではものすごく手厚い形でやっていただいているので、本当に安心している。その利用者は全国的に減少しているということだが、北九州市はどうか。

#### 【事務局】

母子生活支援施設の件については、教育委員会として把握ができておらず、本日お答えすることができない。調べさせていただく。

#### 【事務局】

教育支援室の適材適所についてのご意見だが、現在、北九州市にある4ヶ所の教育支援室はすべて中学校の校長を経験された方が勤めている。その中で、子どもたち一人一人に寄り添った支援ができるように日々、子どもたちに関わらせていただいている。その中でも、令和4年度の4月に、それまで子ども家庭局が所管をしていた「少年支援室」を教育委員会が所管するようになり、「教育支援室」という名称になって2年目を迎えるところである。教育に変わった中で、特に大事にしていきたいことが、教育的支援の充実ということで、教育的支援というのはどういうことなのかと言ったときに、教育支援室という場所は学習の保障というか、学力を高めるというようなそういったところができる場所ではない。むしろ子どもたちがそこに来て、自分のペースで学べるとかそういった時に必要な支援を与えていくことが、まさしく教育的支援であると考えている。子どもたちが望んだときに望んだ支援を与えてあげられるような、そういう機をとらえて、必要な支援を与える。これを教育支援室では教育的支援と考えているので、子どもたちが望むものをどれだけ与えていけるかということについて、日々大事にして子どもたちと関わっている。また、少年支援室の時は、適応指導教室と少年補導センターという言い方で、少年支援室は二通りの関わり方をしていたが、教育に移ってからは、主に適応指導教室、教育支援センターとしての機能を持ったところでの取り組みを充実させているところである。その中で、今までは、個と個、子どもと担当が直接一対一というか担当の者だけで関わるというところで、支援をしていたところを今集団活動とか体験活動というところで、みんなでいろんな体験、学校に行けば、学校行事とか校外学習に行くとかというような経験ができるところも、教育支援室でもできるようにしていく。その中でいろんな関わり、いろんな大人との関わり、子どもたちとの関わりというところができるような、そういった活動も充実させていくというところで、いろんな経験を子どもたちがここに来てよかったとかここで自分の所属していることが、

すごく嬉しいと思うような経験ができるようにしているところが教育的支援ととらえて活動を行っているところである。

#### 【B構成員】

名前が変わったというのは知っていたが、所管が変わったというは知らなかった。

#### 【H構成員】

ご家族やお子さんの心理的支援をしたり、様々なお子さんの状況に合わせて、どういう教育的な場や居場所の提供するのが適切かを教員も相談できる心理職などの専門家が、常時、学校にいるような形が望ましいと思う。

#### 【D構成員】

今通っている場所の居心地向上ということでは、学校の教室がまず居心地の良い場所になるといいと思う。先ほどC構成員がおっしゃってくださったように、一人一人の子どもが大なり小なり内容が違って、自分はこのクラスの中で活躍できたとか活躍できるとか、活躍をちゃんとみんなが認めてくれるとか、失敗してもいいとか、そういう、なかなか目に見えない空気の中で、生活できるというのが、居心地の向上になるかと思う。また、さらに言うと、活躍しなくてもちゃんといていいというか、目に見えて何かができるとかできないとかではなく、その人が安心して通える場、何ができなくてもいいという、そういう場に教室がなるといい。しかし、学校というのはみんな成長発達を目指しているところだから、ステップアップルームという名前もそうだが、例えば学校に来られない人が学校に来たら、プリントをするとか、勉強するとか、そういうふうになってしまう。それをさせないと、学校に来ている意味がないみたいな。「せっかく今日学校来たんやけプリント1枚出して帰り」みたいな感じになってしまう。そのような学校が持っている宿命というか、枠組みというのがある中で、まず来るだけでいい、今は来るだけでいいから来て、給食を食べて帰っていいとか、誰かとお話をして帰っていいとか、草でも抜いて帰ってねとか、助かったよとか。そういうことが大事だと感じる。それから、ステップアップルームという名前の与える印象って本当に大きいんだなというのは今日、事務局の話聞いて思った。6ページ、質問3小学生の設問には、ステップアップルームがない。中学校のところからしかステップアップルームの質問がない。小学校の校長先生からお話があって確かにそうだなと思った。小学校の別室登校の人というのは、保健室がなかなか難しい時は、校長室とか、放送室とか職員室の後ろの大きいテーブルとか、そういったところが居場所になっている。今通っている場の居心地の向上というのは、全市で考えていくことだなあと強く思った。不登校の子どもさんへの

対応をすることによって、さっき申し上げたように、学校に来て、誰かと接するとか、学校に来るために起きて着替えて歩いてくるとか。学校に来るということの意味が勉強だけじゃないということ、子どもの成長発達というのは、学校に来て勉強することだけじゃないんだという、大人の側の概念を外して、笑顔で過ごしてくれる居心地向上をみんなで考えることなのかなと思った。

あともう 1 点、未来へのとびらオンライン教育支援室、これは皆さん参加したことがないと思う。たまたま私は参加する機会が 1 回だけあって、本当にすばらしいものであった。先生方が学習内容をよく練っておられて、そして参加する子どもたちもオンラインで顔を出していないけれど、しっかり先生の話にコメントを送ったり、回答を送って参加したり、オンライン教育支援室に関しては、質問 3 において、中学生の①に、66 人の中ではあるけれども、①に一番多い回答になっていた。未来へのとびらオンライン教育支援室には、もっと参加者をふやし、学習とか、朝起きるとか、いろんなことの良い影響があるので、その充実というのもあるが、広げるということも大事なことだと思った。

#### 【事務局】

先ほどからステップアップルームのことについていろいろ話があり、ステップアップルームの場所が中学校、小学校では違うということだった。先ほど事務局の説明にもあったように、児童のいる場所がそのステップアップルームという名前をつけている教室ではなく、小学校であれば保健室や校長室がステップアップルームとして居場所を確保できている。また中学生は 7 ページの回答を見るとステップアップルームという言葉が周知できてないのかなとも思った。学校によっては、別室だとか空き教室だとか学習室、カウンセリング室と呼び、そういった場所が実際はステップアップルームとして、機能はしていると思っている。ただいろいろご指摘があったように、周知徹底できてないところも課題の一つだと思ったところである。

#### ○議題 4 「学びの場、居場所づくりの取り組み事例紹介について」

##### 【事務局】

**資料 3** 「第 2 回 不登校児童生徒のための教育機会確保に係る検討会議」  
議事（1）～（4）説明資料 に基づき説明。

##### 【H 構成員】

岐阜の草潤中学校は、教職員のマンパワーがあるということだったが、私もこういう学校を作るのがよいのかなと思った。個々のお子さんに手厚く支援できる体制がいると思う。

#### 【A構成員】

岐阜の草潤中学校について、教職員 27 名ということだが、こちらの人選というか、希望されて草潤中学校に行かれたのか、どういう人選をしたのか。

#### 【事務局】

令和 5 年 1 月に視察としてお邪魔させていただいた。その時点では開校から約 2 年経っているが、開校時点の 27 名は皆さんこの中学で教えたいということで希望されてお見えになった。校長先生は、開設準備からたずさわられて、その後 2 年間、令和 3 年度、4 年度、校長先生をお勤めになった方であった。いずれも、草潤中を希望して、手を挙げられた方と伺っている。

#### 【H構成員】

先ほどお話があったように、日々手探りで試行錯誤してくださる先生とか、教職員の人選がとても重要だと思う。

#### 【事務局】

本市の不登校支援の方向性について、ご意見いただき感謝申し上げます。どの子にも安心できる居場所や学びをという観点から、ご意見をいただいて、今後の取り組みに生かして参りたい。特にアンケートに関して、D 構成員からのご意見にあった子ども達や保護者の声を見たときに、予防の観点からこの貴重なアンケート、本当に答えていただいた子どもたち、それから保護者の声にこたえるためにも、学校にしっかりとフィードバックしていくことが大切であると思っている。保護者や子どもが求める「わからないことを教えてもらえる学校」「苦手なことをサポートしてもらえる学校」「いいところを見つけてくれる学校」というのは、新たな学校ではなく、今の学校にもできることではないかと思っているので、こういったことをフィードバックしながら、学校の取り組みに生かしていくことも大事だと考えている。また、今後どんな居場所が欲しいのかという子どもの声を見たとき、E 構成員から、小学生はやはり居場所を求めているんだということ。それから、友達との関係も大事にしていきたいと思っているということ。それから、中学生は居場所だけではなく学習や進路のことも関わっていくということを求めているんだというようなご意見をいただいた。本当にその通りだと思っており、そういった声をしっかりと今後の取り組みに活かしていきたい。

第 3 回では、また今いる居場所をさらに良くしていくこと、それから新たな取り組みについて、また議論を深めていただくが、第 3 回の会議もよろしく願いたい。

○事務局より、第3回会議の日程の件、第2回会議の議事録確認の件、追加意見があった場合の提出期限の件について説明があり、会議は閉会した。